



日学株式会社

代表取締役社長 吉田 朋弘 氏

取材・構成 ● 西原 勝洋
経済評論家

強い使命感をもつて 表示用機材を幅広く製造する『黒板屋さん』



代表取締役社長 吉田 朋弘 氏

「どんなにデジタル技術が進歩しても、人と人が向かい合つて話し合うアナログコミュニケーションの意義は変わりません。しかし、ただ話すだけでなく、話し手が黒板に文字や図を描けば、複数の聞き手の集中点と理解を深められます」

こう語るのは、黒板やホワイトボードをはじめとする表示用機材を幅広く製造する日学株式会社の吉田朋弘社長だ。アナログコミュニケーションを、より有効にする——そうした使命感が、日学の製品には込められている。

黒板の歴史に残る創業者の偉業

日本人なら誰でも、幼稚園や小学校に通っていた時代から、黒板に絵を描いたり、字を書いたりしたことがある。しかし「黒い板」の黒板は、いまやほとんど見ることがなくなった。緑色になり、その時代が長く続いてきた。いまは薄いグレーへの転換期に当たっているらしい。

黒が緑になり、そしてグレーになっても「黒板」と呼ぶことの不思議さ。ホワイトボードが出始めた頃、ある大手新聞社の編集局長が「あの白い黒板に書いてある通り……」

なんて言っていたのを思い出す（業界では、ホワイトボードを「白板」と呼ぶ）。

「黒板」とは、それだけ日本人の生活言語に深く入り込んだ名詞なのだろう。

ところで黒が緑に変わったのは「緑の方が目に優しい」という理由だった。いまグレーが出てきたのは、緑の黒板だと赤いチョーク

で書いた部分が色覚異常者には見分けづらいためだ。

日学のルーツは1950年、吉田

田富雄が小中学校向けの教具販売を目的に設立した吉田商店に遡る。

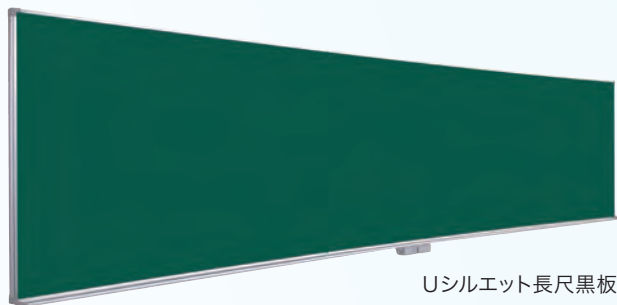
吉田富雄は戦前、軍関係の工員養成所指導員として台湾、フィリピンで現地人の指導に当たった。その時、黒板を使っていたが、当時の粗悪なチョークの粉塵で肺を病む人がいることに心を痛めた。

「粉塵が出ない黒板を作れないものか」

富雄は戦後、教具販売の傍ら、良質な黒板づくりを研究した。そして

1954年、淀川製鋼の協力を得て、わが国初のホーロー加工を施した黒板と白板を商品化した。

Uシルエット長尺黒板



ホーローとは、鉄、アルミニウムなどの金属材料の表面にシリカ（二酸化ケイ素）を主成分とするガラス質の釉薬を高温で焼き付けた素材のことだ。

木材を使った黒板から、金属板を使った黒板やホワイトボードへ――建材用に使われていた金



LAN・USB メモリ対応コピーボード
プラン・ページ

属製ホーローパネルを品質改良し、黒板用に開発した。長らく木材の黒板を使ってきた表示用機材の歴史の中で、この転換は吉田富雄の偉大な功績だ。

黒板やホワイトボードに、「お知らせ」や参考資料を、マグネット画鋲で張り付ける。いまでは当たり前の光景だが、こんなことが可能なのも黒板が木材ではなく鉄になったからだ。

若い読者は知らないだろうが、小学校の先生が木製の黒板に紙を貼る時は、力を込めて画鋲を押し込んでいた。木製でも黒板の表面は硬いから苦勞した。画鋲を抜く時は、また大変だった。やがて、セロハンテープで張るようになったのだ。

吉田富雄は1957年には日本学用品株式会社を設立し、黒板とともに、マグネット画鋲を発明、製造販売に乗り出した。

究極のアナログ、壁面全体がホワイトボード

黒板は木製の時代からそうだったが、寿命の長い商品だ。品質保証期間5年が標準だが、15年ぐらいい使いつても何ともないのが普通だ。

それでも、黒板もホワイトボードも、コーティングした部分を擦るわけだから、いつかは表面のマイクロな傷や凹みに色素がたまり、買い替え時期が来る。

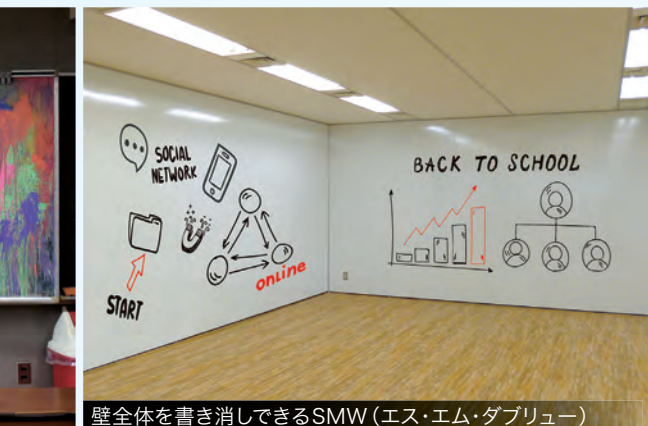
メーカーにとって幸いなことは、日本には小中高校だけで3万3千校ある。幼稚園も1万ある。教育部門だけで、校数の何倍か、あるいは十数倍、いや、おそらくはもっと多くの黒板やホワイトボードが現に使われている。さらに事業所の需要がある。

それで、黒板・ホワイトボードのメーカー数は戦後の最盛期に比べたら半減したとはいえ、依然として50社を超える。厳しい競争が展開されるわけだ。

そうした中で日学はまず品質の向上に取り組み、次いでデジタル技術との融合を目指した。

品質向上の代表例は、日本ガイシとの共同開発によるアルミメッキ鋼板に特殊ホーロー焼き付けを直接施した黒板素材の開発成功だ（1968年）。

様々な工夫も欠かせない。黒板もホ



壁全体を書き消しできるSMW (エス・エム・ダブリュー)



スタイリッシュなフレームレスホワイトボード メタルライン

ホワイトボードも①簡単に裏面に回転できるタイプ②高さ調整が容易なタイプ③移動が手軽なタイプ④普段は部屋のパーテーションとして使えるタイプ……さらに、それらの利点を組み

合わせたものと、多様な品揃えた。

どれも薄さと軽さを追求し、マーカーペンが収納しておく付属品類のデザインがスマートだ。

収納家具の引き戸をホワイトボードにすることもできる。

新しいデジタル技術との融合の代表例は電子黒板だ。日学は1982年に開発・製造に乗り出した。

電子黒板とは、いわばデジタルホワイトボードだ。ボードに記したことは、文字でもグラフでも、絵図でも、即座にコピーして配布できるし、社内LANと結べる。

これは冒頭に紹介した社長の言葉と矛盾するものではない。主役はアナログコミュニケーションだ。その際の利便性を最大限に高めるとともに、アナログコミュニケーションに参加していなかったメンバーにも、コピーや社内LANを使って情報を共有できるようにする仕組みだ。

そして、アツと驚くアナログコミュニケーションの手段が、壁面全体のホワイトボード化だ(写真参照)。技術的には、アルミメッキ銅板に特殊ホーロー焼き付けを直接施した黒板素材の延長線上にある。既に企業の社長室や会議室に採用されている。本年1月、業界初の不燃認証を受けた「不燃SM

W」を発売した。

ホワイトボードに映像を投じるのは簡単だが、より鮮明な映像にするためにはスクリーンがあつた方がよい。磁石でボードに取り付けた棒状の収納箱からスクリーンを、しわが寄ることなく引き出せる周辺機器等も日学は製造している。

「黒板アート甲子園」を主催する心は

2代目社長は用親氏(現会長)。一橋大学を出て金融マンを経て、父親の会社に入った。

2代目社長の大きな業績は中国に現地法人を出したことだ。日本の技術で良質な黒板を安価に製造し、日本へ逆輸入する。それにとどまらず日本仕様の良質な製品は激しい価格競争にも関わらず、中国国内やアジア諸国でも認められつつある。

中国の研究機関や大学院が要求するのは純日本仕様の超高級黒板だった。これは日学の静岡工場で製造し、輸出している。中国の人件費高騰で当初の目論見とは異なりつつあるが、海外拠点を持った意義は大きい。

3代目の現社長、朋弘氏も父親と同じで一橋大学、銀行員を経て当社に入



黒板は1枚ずつ丁寧に手作り



静岡県藤枝市に構える国内工場



黒板アート甲子園2019 最優秀賞受賞 福島県立会津学鳳高校



黒板アート甲子園2018 最優秀賞受賞 埼玉県立大宮光陵高校

社した。3代目は幼稚園生の頃、「大きくなら何になるの」と問われると、「僕は黒板屋さんになるんだ」と答えていたという。「祖父母の刷り込みがあったのでしょう」と朋弘社長は苦笑する。

銀行の同僚たちからは「一国一城の主になるとは、羨ましい」と言われたそうだが、「やってみたらそんなに甘くはなかった。一国一城の主とはとても孤独で辛いものですよ。でも最近はそのが天職だと思えるようになりました」と朋弘社長は言う。入社以来、リーマンショックでの売り上げ激減、回復したと思ったら、東日本大震災、次いで消費税引き上げで、また売り上げ激減と悩まされ続けてきた。

それでも「長く会社をやっていると良い時もあれば悪い時もある。時流に逆らうことなく、ピンチをチャンスに変える」、「仮に売り上げが落ちて、利益を出せる体質を作れば良い」と言う。

その朋弘社長が本業とは、ちよっと離れた形で取り組むのが、黒



会津フェスタ2019 in イオンレイクタウン越谷にて、現役とOBによる「黒板アート甲子園」チャンピオンが対談

板アートコンテスト「日学・黒板アート甲子園」の主催だ。

黒板アートとは、黒板にチョークだけを使って絵を描くことだ。

いま全国の高校には、黒板アートに取り組む美術部がかなりあるそう。5回目にあたる2019年大会には、109校が参加した。作品は美術の専門家が審査する。

かつて、八重洲口の洋食屋で、若者が小さな黒板にチョークだけを使って、料理の絵を中心に据えた「本日のおすすめメニュー」を見る間に仕上げるのに接して驚嘆したことがある。2回目からは、迷わず黒板に描かれた料理を頼むようになった。黒板アートの絵を見ると、

何故か、その料理を食べたくなるのだ。写真だったなら、そうは思えない。

「日学・黒板アート甲子園」公式HPの審査結果の序文に、朋弘社長はこう書いている。

——技術の進歩によって次々



製造風景

に新しいツールが生み出される中で、当社が過去・現在・将来にわたって、お客様に提供する価値は、「人と人の間にあって、それに書くことで考えや思いを伝え、感動を共有する」のをお手伝いすることです——

日学、使命感を持って製品を世に送り出す会社である。

(にしはらかつひろ)

日学株式会社

■代表取締役社長 吉田 朋弘

■設立 昭和32年

■資本金 5千万円

■社員数 118名

■売上高 20億8千万円

■事業内容 ホワイットボード、黒板、電子黒板、掲示板、その他教育、オフィス、ボード設備の製造・販売

■本社 東京都品川区大井1-49-15

■電話 03-6420-2510

■<https://www.nichigaku.co.jp>

きらぼし銀行 麻布支店会員